IATSS三十周年によせて

勝手人間の独り言

杉山雅洋　早稲田大学商学学術院教授

1971年早稲田大学大学院商学研究科博士課程修了。同年早稲田大学助手、講師、助教授を経て81年教授、今日に至る。学内では一貫してアウトサイダーを志向し、唯一の長なる役職はレスリング部長。日本レスリング発祥の地である早稲田レスリングの復活が悲願、学生と奮闘中。

IATSSの基本姿勢は会員の自由闊達性の容認、個性の尊重にあると考える。そこにはかつての日本社会固有の年功序列制はない。私が会員に加えていただいたのは、（旧）西ドイツ・ボン大学留学から帰ってまもなくのことであったと記憶している。ボン大学では交通研究室に通う傍ら、柔道部（日本の大学におけるような厳格な組織ではなく、大学生以外の参加も大幅に認められた一種のクラブ的存在）で学生たちの指導に当たった（どちらが“傍ら”なのかは不明）。日本でのケースとは違い、教える立場の人間でも腕組みをして言葉だけの指示では許されず、実際に相手をして投げ倒すといった見本を示さない限り、彼らの納得は得られなかった。そこでは年功序列の姿はなかった。私自身体力的に最盛期を過ぎた年齢でもあったため、力の強い大男を相手に当初の苦労は並大抵のものではなかった。稽古を終えると近くのパブで文字通り仲間としての歓談を楽しんだ。規律ある日本の運動部にもそれなりによさは一杯あるが、そこにはみられない年齢を超越した交流を味わうことができた。3年間の留学を終えての帰国の際、空港で彼らからラベルに私の名前の入った大瓶のワインを贈られたが、風袋ともでなんと10kgもあった。オーバーチャージを取られる云々の話で、ならばここで飲み干せと言われ、ローテンブルクのトリンクマイスターではないと苦笑し、結局は彼らの応援でなんとか航空会社に無料持ち込みを認めてもらったことが実に楽しい思い出となっている。私の理解ではホンダイズムに近いと思われるこの体験を大切にしたいとの気持ちから、IATSSから誘いを受けた時、自分の力を省みず、喜んで参加させていただくこととした。

IATSSではもろもろの活動の機会をいただいたが、私の想像どおり自由な議論ができた。先輩の諸先生にはさぞかし失礼な振る舞いをしたであろうと遅ればせながら反省しているが、年齢で押さえ込まれるといった体験は一度もなかった。自分の発想の乏しさはさておき、私なりの自由闊達な議論を通し、若い世代、先輩世代からきわめて多くのものを吸収させていただいた。このような活動ができたのもホンダイズムを継承した会員諸氏の寛容さと、同じく優秀な事務局の方々のおかげである（勝手にホンダイズムなる言葉を持ち出すと、ホンダの名前を使うなと言っておられた本田宗一郎さんに怒られそうである）。

時が経過し、会員卒業の段になった。顧問就任を要請された折、辞退しようと真剣に考えた。何より顧問の名に値しないことが最大の理由であるが、一つには名簿の半分以上が顧問となっている老齢社会が異常と思われたためでもあった。熟考の末IATSSに留まらせていただいたのは、会員時代の充実した気持ちを持ち続けたいとの願いからである。私の力では若い世代の方々に迷惑をかける一方であるとの判断から、卒業後は一度もIATSSの行事・活動には出向いていない。文書等でその活動を窺い知るところであるが、相変わらず裨益するものが大である。勝手な理屈の勝手な人間の存在を許していただいているのも、IATSSの大きな特徴であると勝手に考えている。

「企業30年説」を学会に当てはめるのは適切ではないが、30年の存続は大変なものである。これからはその先にあるものが問われよう。新たな活動の推進のため過去との決別が必要なものもあろうが、IATSSの特徴だけは活かし続けて欲しいと切実に願っている。